
ファンタシースターポータブル2i ~ 異世界の5人 ~

サイクロン&ハリケーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタシースターポータブル2i 異世界の5人

【Nコード】

N4736Z

【作者名】

サイクロン&ハリケーン

【あらすじ】

それは遠い星のお話。軍事会社リトルウィングにルーク・ファイルンという青年がいた。彼は亜空間事件を解決した英雄である。

そして欠片事件から半年後がたったある日、何やら怪しい5人がある会話をしている。彼等は何者なのか、まだ知るのは先の事であった。

リトルウィングを飛び出したルークは、ルークの妹、弟に3年ぶりに再会する。そしてルークが決断をしたことはいったい……

ブログ：謎の5人（前書き）

初投稿です。自信がないですが、どうぞ御覧ください（ちなみに主人公はまだ出ません）。

プロローグ：謎の5人

? 「ここは、どこだ？」

? 2 「どうやら成功したみたいだね。」

? 3 「ああ、そのようだな。」

? 「失敗するかと思っただが・・・、何もなくて良かった。」

? 4 「失敗するわけないツスよ。俺が造ったんツスよ」

? 5 「その様なしゃべり方だから、そう言われるんだ。」

? 2 「でも、彼の腕はたしかだよ？」

? 4 「良いこと言ってくれるじゃないツスカ。」

? 「そんなことより、本当に大丈夫なのか？」

? 5 「ああ、大丈夫だ。準備はできてる。俺達の目的を達成させよう。」

? 「ふっふっふ、そうか。」

? 3 「時間もなし、もう行こうぜ。」

? 2 「そつだね。」

? 5 「まてよ、先々行くのは良くない、そつだなま^ずは・・・。」

ブログ：謎の5人（後書き）

うーん、とりあえずここまでですね。誤字、脱字がありましたら、教えてください。

第一話：依頼 1（前書き）

続けて投稿です。前は会話だけだった。でも後悔はしていないようなあるような。

まあ前は気にせず御覧ください。

第一話：依頼 1

「マイルーム」

ここの部屋に1人の青年がいた。彼の名はルーク・フィレン、亜空間事件を解決した英雄である。だが、今は彼はベッドで寝ている。病気出もなく怪我したわけではない。彼に取って久しぶりの休日になる……はずだった。

コンコン

「はい。」

「ルーク？いる？」

「（うるさいのが来たな）ああ」

扉が開き姿を見せたのはエミリアだった。

「何よ、その返事は？」

「別に（言ったら殺される）で、何のようだ？」

「うーん、実はさ。あんたにお願いしたい事があるの」

「なんだ？」

「実はナギサに声をかけたんだけど、依頼が入っていけなくなった

んだ。」

「んで？」

「だから、あんたに来てもらいたいんだ」

「どこに？」

「依頼」

「依頼？・・・悪いが、今日は俺は休・・・」

「お父さんに声を掛けたら、ルークと行けと言われた」

「おいおい・・・」

「ルーク・・・お願い」

少し考えて、ため息を付き

「わかったよ。付いて行けばいいんだろ？」

と答えエミリアが笑顔で

「ありがとう」と答えた。

「やれやれ」と言いながらベッドから出でる。

「依頼内容は？」とエミリアに聞く。

「うーん、何かパルムで不審な5人を見たんだって。」

「その5人を何者が調べると。」

「そう、その通り」

「さっさと終わらせよう。せつかくの休日なのに仕事するなんて」

「ぶつぶつ言わないの。はやくい」

「やれやれ」呟きながら、部屋を出た。

第一話：依頼 1（後書き）

やっぱり小説は難しいですね。でも頑張ります。
・・・うん、頑張る

第一話：依頼2（前書き）

少し編集しました。

ルーク「編集して、余計変になったんじゃないのか？」

そ、そんなことないさ・・・。

第一話：依頼2

〰️パルム草原〰️

依頼を受けたエミリアと無理やり依頼を受けさせられたルークがいた。

「エミリア？ここに依頼にあつた不審な5人を見た場所か？」

「うん。そうだけど、誰もいないね？」

「だが、油断はするなよ。いきなり襲つて来るときもあるからな。」

つとエミリアに注意を促した。

「わかった」つと返事をするエミリア。

「とりあえず、辺りに誰かいないか、搜索するか。」

「そうだね、まずは人を探さな・・・」

「！！？エミリア！！伏せろ！！」と叫ぶルーク。

「え？」

「ちっ」とエミリアを無理やり右に押す。

「痛っ」と地面に尻餅をついたエミリアが声を出す。

「くそ、どこからだ」辺りを見渡すルーク。っとそこに。

「あゝあ、外しちゃった。結構自信あったんだけどなあゝゝ。」
と声がした。

「誰だ!!」っと声がした方向に声を出した。

「普通、自分から名乗るものでしょう? 礼儀をしないの?」

「なに?」

「いたたたっ」お尻を擦りながら立ち上がるエミリア。

「大丈夫か。エミリア?」

「人を押し倒しといて、その台詞言っかな? まあ大丈夫だけど。」

「わりい、その方法しかなかったから。」

「いやいや、その他にも方法があるでしょう!？」

などの会話をしていると、

「何? 漫才でもやってるの? あんまり面白くないよゝゝ」

「姿を見せないお前に言われたくない。っていうか漫才なんてして
いない」と声がする方向に喋る。がしかし、

「どこ見て喋ってるの、後ろだよゝゝ。君の後ろ」

「「!!??」と振り向く2人。

「いつからそこに?」っと、ルークが質問をする。

「『お前に言われたくない』って辺りかなあ〜?」

「うつつ、何かしゃべり方が腹が立つ。」っとエミリアが言う。

「あははは、いい慣れてるから、痛くも痒くもないよ〜。どう?
?余計に腹が立ったでしょう?」

「それより、どうやって後ろに?」ルークが質問をする。

「あまり腹が立たなかったみたいだね〜、まあ、いいや。それより
答えないとね〜、君の質問に〜。簡単だよ〜。僕ちんの特殊能力だ
よ〜。」

「特殊能力?」

「特殊能力って言っても、ピンと来ないと思うよ〜。まあ、さらに
簡単に言つとね〜、……僕は普通の人間じゃあないんだよ。」
言い方が少し悲しそうに話す。

「えっ?」

「でも……、どうでもいいことだよね〜。おっと忘れるとこ
ろだったよ〜。」っと、何かを思い出したかのように、背筋を伸ば
して喋る……が。

「実はさ、君達にお願いがあるんだ」全く礼儀のない言い方で
ルークに言う。

「誰がお前のお願いを聞くもんか。」っと、そう答えるルークに。

「ほんと。襲撃しといてなによ、それ？しかも、礼儀がまったくな
いし」

エミリアもそう答える。

「困っている人を助ける仕事なんでしょう？助けてよ。子供だ
よ？僕ちゃん」

「子供も大人も関係ない。襲撃した理由を聞き出してやる。つてい
うか自分からいうか？『子供だよ？』つて」つと言いながら、シッ
プウジンライを構える。

「子供だから、子供つて言っただけだよ。それよりなに？子供
に武器使うの？大人げないなよ？ま、武器を使っても君は勝て
ないけどね」

つと言いながらせロセイバーを構える。

「エミリア！！下がってろ！！」

「ルーク、あたしも戦うよ」

「パートナーの言う事聞くもんだよね。って君が戦っても足手まといになると思うよ。」

つと笑いながら言う。

「うつさい、あんたに聞いて……」

「エミリア。下がってる……大丈夫、そう簡単にやられないさ。
」つと真剣な顔でエミリアに言う。エミリアも観念したのか、

「わかった。」つと、答えた。

「さてと、準備はいいか？」つと子供に言う。

「僕ちゃんは、いつでもいいよ」。あ、そうそう、僕ちんの名前はミケ。ミケ・ラン・ジャータン」

そしてミケはルークに飛び掛かる。

第一話：依頼2（後書き）

とりあえず、ここまで。

ルーク「やっぱり、内容が」

誤字、脱字がありましたら教えてください。

ルーク「無視するなよ」

第一話：依頼3（前書き）

初戦闘シーンです。

ルーク「俺の出番が多くなるわけだ（内容は心配だけど）」

では、どうぞ

第一話：依頼3

「ふっ、遅いな」つといきなり飛び掛かるミケに対し、右側に避け、ミケに攻撃の体勢をしようとした時、

「君がねっ」つと言った瞬間、地面に左手を付き、左手をグイッと地面を押し飛び上がり、ゼロセイバーをしまい、インフィニットブラスターを構え、ルークに射つ。

「!!!!」

攻撃の体勢に入っていたせいか、顔を左に避ける事しか出来ず、2つの弾の内、一発頬にすれた。そして、そのすれた所から血が出てきた。

「ルーク!!」っと叫んだエミリアが戦いに加わろうとしたが、

「下がってろっていただろ!!」っとルークが叫ぶ。

「あんな奴、1人で戦おうなんて、言う方がおかしいよ!!」

「あははは、仲間割れしてるっ」っと地面に着地していたミケが、いつの間にかインフィニットブラスターをしまい、ゼロセイバーを回しながら、嘲笑う。

「ちっ、調子に乗りやがって」

「ルーク!!」

「……。分かったよ、だが、無理だけするな」

「あんたも、無理はしないでよ」

「ああ、分かった」

「あちやゝ、2対1になっちゃったゝ。でもねゝ、僕ちゃんはねゝ、2対1でも勝てるんだよねゝ。」ゼロセイバーを回しながら言う。

「その自信、いつまで続くと思うなよ」

「パートナーに『下がってる』といった奴がそのセリフって……あははは、変なゝゝ。」

「お喋りは、ここまでだ」っとミケに睨み付け、シップウジンライをしまい、アカツキ・印を持ち、ミケに向ける。

「あたし達をあまりなめないで」クラール・リタ・ヴィサス？を持つエミリア。

「別になめてないけどなゝ、」っとまだ嘲笑ってるのか、ゼロセイバーを回してる。

「その言い方とその態度が腹が立つっての。」っとエミリアが言う。

「あつ、そうなんだゝ、だったらねゝゝ」っとゼロセイバーを回すのをやめ、

目をつぶるミケ。そして・・・ゆっくり目を開け・・・

「・・・、普通に喋ればいいんだね」っと言い、ゼロセイバーをしまい、何やら構えをとり、そして・・・。

「じゃあ、戦うことも普通にいかせてもらっよ。もう手加減なしだよ！！本気でいくからね！！」っと言った瞬間体が光始めた。

「「！！！！」」

2人が驚く。

2人の前に姿を表したのは、暴走中のナノブラストの姿であった。

「ばっ、バカな」っと思くルーク

「嘘でしょう！？何でヒューマンがナノブラストができるのよ！！」っと思くエミリア。

(言い忘れましたが、ミケはヒューマンです)

「言ったはずだよ、僕は普通の人間じゃあないって、あと1つ言っとくけど、僕のナノブラストは時間制限はない。僕のナノブラストを止めることが出来るのは」

「お前を倒す事だ。」

「そのとおり。それと、自分の意思でも止めることも出来るんだ。さてと、お喋りは終わりだったね。じゃあ望み通り終わらせてあげよ。君達が死ぬことで。」っと思くに飛び掛かりあつという間

にルークの目の前に来ていた。

「!?(速い)!!」と思ったルークだが、

ドン!!

腹に蹴りを入れられ、吹っ飛ぶルーク。

「グッ!!」ルークが飛ばされる。

しかし、凄いスピードでルークに追いついたミケがルークを踏み台にするかのように、おもいきり腹を踏む。そしてルークが地面に叩きつかれる。

「ぐぐはぁッ!!」地面に叩きつかれたと同時に口から血を出す。

「ルーク!!」っと近寄るが、

「……終わりだ、ルーク……」と言い残しルーク止めを指そうとしたが、。

……。

「言っただろ?お喋りは終わりだって。」っとニヤリと笑ったルーク。

「ばっ!!!!」っとびっくりしたミケ。その訳は……ルークがアカツキ・印で攻撃を防いでいたのだ。

「バカな、なぜ攻撃を防げられたんだ。君は完全に万事休すだったはず!!」　　つと焦るミケ。

「俺がいつ万事休すに追い詰められたつと言った?」　　つとそえ答えるルーク。

「まあ、お前の攻撃を耐えられたのは亜空間事件を乗り越えたおかげかな。いや、結構、力が付いたもんな」　　つと今度はルークがミケ言い方だった言い方でミケを嘲笑う。

「ふざけ・・・、ん? 亜空間事件? ああ、やつぱりそうか。君、亜空間事件を解決し、グルールを救った英雄、ルーク・フィレンか。」

「ご名答。まっ、英雄は余計だな。」
つと答えるルーク。

「しかし、例え英雄でも、あの攻撃を食らったら誰だって・・・」

「悪いが、あんな攻撃、何回も食らったらからね。まっ、慣れちゃったってやつ?」　　つとまた嘲笑うルーク

「くそ、なめがつて。どうせ急所を外したにちがいない」　　つと言ったミケだが・・・

「ふっ、どうやら、俺たちの勝ちみたいだな。」　　つと言うルーク。

「えっ?」　　つと呆気ない言葉で言うミケ。そして、

「!!--!!」

何かを察知したミケだが、気付くのが遅く何かにぶつかり、遠くに吹っ飛ぶミケ。それはエミリアが放ったミラージュブラスト、コンル（氷刃ノ疾風）だった。

遠くに飛ばされた先には、大きな木が一本立っており、その勢いのまま、ミケは木に叩き付けられた。

バツキイイイ〜ツ

つと木が折れた音がし、勢いが強かったせいか、そのまま木を通り越し、折れた木を少し離れた所で、地面に落ちた。

「ふう〜。・・・（・・・終わったかの？）」「つと警戒をルークは息を吐く。

「ルーク！大丈夫？」

「ああ、何とか。しかし、エミリア？なぜブラストがたまってたんだ？」

「ああ、それ？実はバスクからもらったのを食べたんだ。これだよ。」

「ん？そのクッキーみたいなやつ？」

「そうだよ、これ美味しいんだよ。」

「まあ戦闘中に食べるのはどうかしてるが、とにかく助かったよ。ありがとな、エミリア。」つとエミリアにお礼をするルーク。

「最初の言葉が気になるけど、まあいいか。」っと笑うエミリア。

「ふふっ」っとつられて笑うルーク。

「あつ、それよりルーク？あいつどうする？」っとルークに聞く。

「そのままにしとくのは、あれだしな。とりあえず連て帰るか。」

「えっ？」っとエミリアが言った時、

「くっっ」

「！！！！」

「ま・・・まだ・・・まだだ・・・僕は・・・まだ・・・負け・・・てない・・・」かなりフラフラになりながら立つミケ。あまり力が無いのかナノブラストの状態ではない。

「・・・・・・」

そのミケを見たルークとエミリアがそれぞれ違う反応した。

「やれやれ」っとルーク

「あれだけ、やられておいてまだ立つかな」っとエミリア

「さあ、こい」っと言うミケだったが、その時。

？「あつ、見つけたぞ、ミケ。」

？2「あの野郎、またやりやがったな。」

「！！！」

その声に驚いたルークとエミリアは、声がしたほうを見た。そこには、2人が歩いてくる。1人はミケと同じヒューマンで18～19歳ぐらいの背の高い青年。もう1人はデューマンで15～16歳ぐらいのなかなか背の高い少年がやって来た。

第一話：依頼3（後書き）

誤字、脱

ルーク「ちょっと、いいか（怒）」

あれ？何で、怒っ

ルーク「ミラージュブラスト！！！」

ぎゃ~~~~~。

エミリア「誤字、脱字があったら教えてね」

そ……それ……俺の……セリフ……

第一話：依頼4（前書き）

何回も読み直したから多分大丈夫です。

では、どうぞ

第一話：依頼4

18〜19歳ぐらいのヒューマンの青年が、ルークとエミリアに近づく。

？「すみません、僕の弟が迷惑をかけましたか？」

？2「兄貴、ミケのあの姿とこの2人の疲れ具合を見る限り、迷惑をかけたに決まってるだろ？」

15〜16歳ぐらいのデューマンの少年が言う。

「あ、あの〜、あなたたちは？」　とエミリアが2人に訪ねる。

？「ああ、。申し訳ありません。紹介が遅れました。僕の名前は、デイオン。デイオン・バーデン」

？2「俺は、ソロ。ソロ・レスター」

つと青年と少年が自己紹介をする。

「俺の名前は……」

つとルークが自己紹介しようとしたが、

「君たちのことなら、よく知ってるよ。ルークさんとエミリアさんですよね？」

「「えっ?」「っと驚くルークとエミリア。」

「ど、どうして、あたし達の名前を?」

「何故って、お前達よく雑誌などに載ってじゃあねえかよ」

「雑誌に載ってるだけで、実際パツと見ただけで、分かるものか?」
っと聞くルーク。

「……、分かったよ、正直に言うよ。」「っとディオンが言う。

「いいのか?兄貴?」

「言わないと、疑われるからね。だが、その前にミケのことで謝らないと」っとディオン。

「まったく、アイツのせいで、仕事もやりにくくなるだらけだ。」
っソロが右手を頭に当て、ため息をつく。

「ミケ、こっちにこい」っとソロが叫ぶ。

「……。」ムスツとするミケ。しかし、

「僕の頼みでも……かい?」っとディオンがいう。

「ッ!!!!」（顔は笑っているが、なんだ、この威圧感は）「っとルークは感じた。

ミケはしぶしぶ頷き、ゆっくりディオンの近づく。

「瞬間移動みたいな特殊能力が使えるんだから、使えばいいじゃん」
と言ったエミリアだったが、

「力が残ってないから、使えない」っと苛立ちながら言う。

「ミケ！―さっさとこの2人に謝れ」っとミケ言うソロ。

「・・・ごめん」っとミケが心がこもってない謝り方をする。

すると、

ドカツ！！

ディオンのミケを叩きつけ、ミケの頭を押しながら、

「ちゃんと謝りな？ミケ。」っとディオンの言う。

「痛い痛い、ディオン兄さん、痛いよ。」っと痛がるミケ。

「謝りなさいっと、言ってるんだよ。」っさらに押し付けるディオ
ン。

「うわゝゝゝ、痛そう。」っとエミリアが言った。

「わ、分かった。ご、ごめんなさい！！」っとミケがもう一度謝る。

「いいよ、よく出来たね。」っと言いながら、ディオンの押し付けた手を離す。

「だいたい、人を襲撃しといて、謝るだけでいいのか？」っと思問がるソロ。

「そうだね、どうしたらいいかな？」っと思オン。

「えっ……、僕、謝った意味くない？」っと思ケ。

「……もう一度、謝るかい？」っと思顔でミケに睨む。

「いやいや、もういいよ」

「はあ……、どうする？ルーク？」っと思ルークに言う。

「まあ、俺たちも戦って、ミケに傷付けたしな。」
っと思ルーク。

「そうだ、君たちも謝……、痛ッ！！」またディオンの頭を叩きつけられる。

「もう一度、謝りなさい」っと思オンがミケの頭をさっきより強く押しながら言う。

「ごめんなさいー！！」

っと思ケ。

「はあゝゝ、」また右手を頭に当て、ため息をつくソロ。

「1ついいか？」っとルークがディオンの質問をする。

「はい、何でしょうか？」っと威圧感のない笑顔で答えるディオン。

「お前たちは……」っと質問をしようとしたが、突然、

ピピピッピピッ、

っとエミリアの通信がなった。

「誰からだ？」っとエミリアに言うルーク。

「ええっと、お父さんからだ」っと通信に出る。

『おい、エミリア、ルーク。依頼に会った不審人物の5人がガーディアンズに捕まった。どうやらガーディアンズが巡回中に見つけたらしい。不審な5人なんだが、元ローグス3人と強盗2人だったらしい。どうやら5人で銀行を襲う計画をしていたらしい。やつらの持ち物からそれらに使う道具もあった。』

『っていう事だから、帰って来てもいいぞ。』

『と通信を切るクラウチ。』

「っていつか、依頼を受けてたの忘れてたな。」っと右手を頭に当てるルーク。

「いろいろあったもんね。さすがにもう疲れたよ」っとエミリアが答える。

「そうだな、久しぶり凄い戦いをしたしな」っとルークも言う。

「そういえば、質問があるって言ってたね？」っとディオンのルークに言うが。

「兄貴、俺が見る限り彼らは疲れてるし、長話もあれだ。日を改めないか？それにミケの説教しないと」っとソロが言う。

「えっ……また……説教？勘弁してよ。」っと叫ぶミケ。

「うーん、僕はその意見に賛成だけど……、君たちは？」

「そうだな、とりあえず今日は帰ろうか？エミリア？」

「いいの？ルーク？まだ会って時間も経ってないのに信じていいの？」っと言うエミリア。

「とりあえず、日を改めて話すことにするよ」っと答えるルーク。

「じゃ、この店で話すから。」っとルークに店の名前が書いたパンフレットを渡す。

「分かった、じゃこの店で、」っとパンフレットをしまいながら言うルーク。

「じゃ、3日後に」っとディオンの言う。そして、ディオンの

「さてと、ミケ、ソロ行こうか。」っといい何やらボタンをいじってる。数秒後船が真上に止まり、ゆっくり降りてきた。

「じゃ、3日後に」っとディオオンが右手をあげながら船に乗り、その後にはソロ、ミケが続く。ミケは少しまだ、フラフラしている。そしてミケが振り返り、頭を下げる。

ドアが閉まり、ディオオン達の乗った船は立ち去って行った。

「エミリア、俺たちも帰るか。」っとエミリアにいい、

「そうだね、帰ろうか。」っとエミリアが船を呼ぶ。ディオオン達の船とは違い、ふねが着くのは遅い。数分後、船が到着し、ゆっくり船が降りてくる。

「さあ、帰ろうか?」っとエミリアが言う。

「そうだな」っと船に乗ろうとしたが、

「???」っと不意にルークが振り返る。

「……」辺りを警戒してるのか、辺りを見渡している。

「何やってるの、置いていくよ。」

「気のせいかな?」っと警戒していたルークだが、エミリアが急かされたので、急いで船に乗る。

そして、エミリア達の乗った船が飛び立って行った。

「……ガサッ!!」

?「危ねえ、危ねえ、アイツ警戒してたよ」

? 2 「あの人、なかなかの腕前だったね。凄い戦いだったね。それもある子供も」

? 3 「ま、俺たちの相手じゃないだろう。まだあの腕じゃ」

? 5 「でも、あいつと戦いたい。っていうか今直ぐにでも」

? 「よせ、よせ、まだ俺たちの力を見せるのはあとだ。」

? 3 「そうだな」

? 4 「はあっはあっはあ、やっと見つけたッスよ。置いてくなんてひどいッスよ」

? 「わりいな、さてと、行くか」

? 2 「そうですね。私達の計画を達成するために」

第一話：依頼（終）

第一話：依頼4（後書き）

まず1つとして、エミリア達の船を呼ぶようにしたのは、ミケが船を壊してしまうので呼ぶようにしました。

正直に言うと、どうやってパルムに？や船はどうしたの？と書いて思ったのでそのような形になりました。

1―1 依頼報告（前書き）

第二話では、ごさいません。第二話が始まる前ですので、1―1にしました。

最初の1―□ は、 第一話、みたいな、ものです。

では、どうぞ。

1―1 依頼報告

「リトルウィング」

リトルウィングにしたルークとエミリア。そうしてエミリアがルークに言う。

「あんた、本当に怪我、大丈夫なの？」　　つとエミリアがルークの怪我の心配をする。

「ああ、何とかな。」　　つと答える、ルークだが……

「そんなこと言うけどさ、あの時の傷が大きくなったら……」　　つと言う。

そう、ルークは一度、怪我をしたのである。だがルークは、

「大袈裟だよ。単なる、かすり傷だろ？」　　つとルークは、言うが。

「あれが、かすり傷って言えたもんね。鍼を縫うほどの、怪我だったのに」

「怪我を心配してくれるのは、嬉しいが、クラウドに依頼の報告しないと。まあ、不審人物の5人はガーディアンズ達が捕まえたがな」　　つと言うルークにたいして。

「あの3人の事、話すの？」　　つと言うエミリア。

だが、ルークは、

「いや、まだ言わない方がいい。彼らを知らなさすぎるからな。」
　　とルークが答える。

「でも、その怪我を見て、何か会ったって、聞かれたらどうするの？」
　　とエミリアがルークに聞く。

そしてルークは、

「よそを見たら、崖から落ちたとしても、言えればいいだろ。」
　　とルーク言う。

「……絶対信用しないと思う。」
　　とエミリアが呆れながら言う。

「まあ、その時に、言い訳を考えよう。とりあえず、事務所に行こう。」
　　とルークがエミリアに言う。

「（スッゴい、心配なんですけど）」
　　と、口では言わず、心の中で思いながらルークに付いていくエミリア。

（リトルウィング事務所）
　　プシュー、

　　とドアが開き、事務所の中に入る、ルークとエミリア。奥には、
　　クラウチがいた。

「クラウチ。今帰ったぞ」
　　とルーク。

「おう、帰ったか……。ってか、おめえ、どうしたんだよ？その怪我は？」っと聞いているクラウチ。

「これか？油断していたら、原生生物に攻撃された。」っとルークが答える。

「……、そうか。エミリアは怪我はないのか？」っとエミリアも聞く。

「あたしは特に痛いところは、ないよ」っとエミリアが答える。

「んで、何のようだ？」っとクラウチがまた質問する。

「依頼の方は、ガーディアンズが片付けたが、一応、依頼報告をしようと思ったんだよ」っとルークが答える。

そして、更にルークは言う。

「もう少し、あの辺を搜索した方がいいかもしれない」っとルークが答えた。

「えっ？」っとエミリア。

「なにっ？」っとクラウチ。

「どういう意味だ？」っとクラウチが質問する。

「……、単なる勘だ」っとルークが答えた。

「「????」「」っとクラウチとエミリアが頭の上に、?マークが浮かぶ。

「・・・それより、ルーク。今日、おめえ、休みだったな?今日はもういいから、部屋で休め。今日の休日は明日にするからよ。」っと行ったクラウチだが。

「なあ、クラウチ?その休日、3日後にしてくれないか?」っとルークが言う。

「んっ?何でだ?」っとクラウチが聞く。

「その日、少し行きたい場所があるんだ。もしかしたら、1日になるかもしれない」っとルークが答えた。

「????、まあ、おめえさん、が3日後にしたいなら別にいいけどよ」っとクラウチは許可をした。

「(やつぱり、行くんた・・・)」っとエミリアが心配そうに、心の中で呟いた。

「じゃ、クラウチ。俺はこれで、失礼するよ」っとルークは、右手を上げ、事務所を出た。

ルークが部屋を出たのを確認すると、

「んでだ、アイツ、何で怪我をしたんだ?」っとエミリアに聞くクラウチ。

「えっ？あ、あいつ、いつ、言ってたじゃん。げ、原生生物に攻撃されたって」っと焦りながら言うエミリア。

更にクラウチは、

「あんな嘘、ガキでも言えらあ。嘘を聞かされて、素直に、はい、そうですね？って言うわけねえだろ？だいたい、急に襲われたからと言って、あんな怪我はしないだろ？アイツならなあおさら。」っとクラウチが言う。

「うううっ、」っと更に焦り、言葉を失うエミリア。

「・・・、お前のその焦り様から見て、やはり、原生生物に攻撃されたのは嘘だな？」っとエミリアに聞く。

もう、観念したのか、エミリアは

「うん、」

っとエミリアは頷いた。

クラウチは右手を頭に当て、ため息をつく。

「詳しいこと・・・、話せるか？」っとクラウチはエミリアに聞く。エミリアは、コクリっと頷き、依頼中に、あったことを話した。

「なるほど、」んで、3日後に会おう、ってことで、休日を3日後に

したんだな？」っと難しい顔する。

「うん・・・」っと、エミリアは、頷いた。どこか、元気がない返事だった。

「まあ、さらに詳しい内容は、アイツから聞くとして、エミリアは今日はもう、休んでいいぞ。」っとクラウドが言う。

「うん、わかった」っとエミリアは答え、エミリアも事務所を出た。事務所出てすぐに、

「クラウドに、話したんだな？」っと不意に右から声がした。

「うええっ？」っとエミリアが驚く。

声がした方を見ると、ルークが立っていた。なにやら怒った顔している。

「クラウドに、話したんだな？って聞いてるんだ！！」っとさっきより大きな声で言う。

「あ、あたしだって、言いたくなかったわよ！！。でも、お父さんに聞かれて、仕方がなく。そもそも、あんたの嘘が、下手だから、こっとなったんじゃないの！！？」っとエミリアも怒鳴る。

「だから何か？それで話してしまうのかよ！！」っとルークが言う。
ガヤガガヤ

つと回りが騒がしくなる。

すると、事務所からクラウチ、ウルスラ、チエルシーが出てきた。

「おい、ルーク！おめえ、いい加減にしろよ！！」つとクラウチが怒鳴る。

「エミリアの言う通り、正直に話さない、おめえが悪いんじゃないのか？」つとクラウチがルークに言う。

「正直に話さない？それだけ、俺が悪いのか？話せない事を聞くあんたも悪いじゃないのか？」つとルークがクラウチ言う。

「てめえつ」つとクラウチ言うが、

「ルーク！あんだ、本当にいい加減しなさいよ！！」つとまたエミリアがルークに怒鳴る。

「はぁ・・・、わかったよ・・・」

つとルークは、そのまま部屋には行かず、マイシップに入って行った。

「てめえ、まだ話しは」つとクラウチが言うが、ルークは無視して、マイシップに乗る。

そして、そのままどこかに行ってしまった。

「エミリアっ？アイツに酷いこと・・・」言われたのか？って言

おうとしたクラウドだが、

「……………」エミリアは涙を流してた。

「エミリア！！」っと心配したクラウド。

「どうしたんだよ？本当にアイツに酷いこと言われたのか？」っとクラウドが焦って、エミリアに聞く。

「……………」エミリアは答えない。いや、答える事が出来ない。エミリアは後悔していた。無駄だと分かっていたながら、クラウドに嘘を言ったルーク。それなのに、嘘が下手だからつと言い、ルークのせいにした。いや、気にしてるのはそこではない。今までルークとあれほどまで、口喧嘩をした事がない。そして、マイシップに乗るルーク。そう、それはまるで、家を飛び出した自分と似ている出はないか。それをエミリアは気にしていた。何しろ、ルークは戦いで怪我をしている。前の傷も完全に治ってもいないにも、かわらず。エミリアはそれを気にしていた。

「仕方ねえ、ルークの方は俺が追う。エミリアはこのまま休め。いいな？」っとクラウドが言うが、

「お父さん、あたしも行く」っと言つエミリア。

「なに？」っとクラウドが聞き返す。

「嫌な予感がするの……………」っとエミリア

「嫌な予感だと？ちっ、仕方ねえ。ウルスラ、チェルシー、ちよっくら、行ってくる。留守は任せたぜ。」っとウルスラとチェルシーに声を掛ける。

「わかったわ。」っとウルスラ。

「ちゃんト、つれテ、帰って来てヨ」っとチエルシー。

そしてエミリアとクラウチはマイシップに乗り込んだ。

1-1 依頼報告（後書き）

登場人物の紹介は、次の話が終了したら、書こうと思います。

○ルーク

○ディオーン

○ソロ

○ミケ

○???（次の話に登場）

の五名です（ちなみに、この登場人物の紹介はオリキャラの紹介です
ので、エミリア達など紹介はしません。）

誤字、脱字がありましたら、教えてください。

ルーク「次話もよろしく」

1 | 2 悲しい決断（前書き）

うん、少しずつですが、書くのが慣れました。しかし、もっと頑張ります。
では、

1 | 2 悲しい決断をご覧ください。

1―2 悲しい決断

くパルム大都市・ショッピング街く

たくさんの人で賑わう、パルム大都市のショッピング街。その中に人の青年が歩いていていた。

「はあ〜」

つとため息をつく青年。そう、ため息をついた青年はルークである。

「俺、何であんな事を言っただろ」

つとリトルウィングで自分が言っただ事を後悔していたのであった。

「あんな事を言っで、更に逃げたんだ、帰りにくい」

つとなど独り言を言っていると、後ろから、

「何をブツブツ言ってるの？」つと声がした。

振り返ってみると、そこには、1人の女性だった。

「・・・、なんだ、お前か。」つとルークは女性に言った。

「なんだ、つとは何なの？久しぶりに再会したのに、最初の言葉はそれ？」つと女性は腕組みをしながら言った。

「ほんの二年前に会っただろ？」つとルーク。

「違うわよ、三年前よ。お父さんやお母さんの誕生日やお盆（お盆がある設定）に帰って来ないのは、”お兄ちゃん”だけだよ。」つと女性が言う。

「なんと言えはわかる。俺を”お兄ちゃん”って呼ぶなっって言ってる。ソラ。」

「お兄ちゃんだからお兄ちゃんって言って何が悪いの？」

「恥ずかしいんだよ！！」つと女性に怒る。

ルークの話していた、女性、ルークの妹のソラ・ミル・オルテガである。

そしてソラは、

「じゃあ、何て呼んでほしい？お兄ちゃん？兄さん？それとも、デイオ兄さん？」

「最後のはやめろ」つとルーク。

「……、いつまで、自分をかくすの？」つとソラ。

「……」つと黙るルーク。

「今まで”デイオ”として生きてきたのに、なぜ偽名を？」つとソラ聞く。

「やっぱり、兄さん。リトルウィングを辞めるつもりなの？」つ

とソラが聞く。

「ああ、そうだ。いや、そのつもりだったんだが……。」

っとまた黙ってしまうルーク。

「辞めるに辞められなくなってしまった。」っと続きを言うソラ。

「ああ、そうだよ。今、思うとなぜ偽名を使ったんだか……。」
っと後悔するルーク。

「じゃあ、どうするの?」っとソラが聞く。

「この先もルークとして生きるか、それとも、ルークを捨てて、デ
イオとして生きるか」っとソラが言う。

「……」下を向くルーク。

「お兄ち……、兄さん。」

「……俺は、」っと答えを言おうとしたルークだが、

「あつ、いたいた。ちょっとお姉ちゃん。置いていかないでよ。」
っと後ろから男の子がやって来た。そして、

「もう、酷いよ……って、うわっ、デイオお兄ちゃん。」っと
驚く男の子。

「よお、リオル。久しぶり」っと男の子に言う。

「ほんと久しぶりだよ。雑誌などでお兄ちゃんの活躍を見たよ。すごいねえ、亜空間事件を解決するなんて、しかも英雄だよ」っと笑顔で言うリオル。

この男の子の名前は、リオル。リオル・ルタ・オルテガ。ルークの弟である。

そしてリオルは、

「あつ、しまった。今はディオじゃないもんね。ルークだった。」
っとリオルが言う。

「いや、ディオいい。」っとルーク。

「お兄ちゃん？」っとソラが言う。

「今日、限りで、ルークを捨てる。そして今日からディオで生きていく」っとルーク。

「いいの？お兄ちゃん」っとソラ。

「ああ、もう決めた。……それに……もう、あそこ（リトルウィング）には、帰れないしな。」っとルークが言う。

「じゃあ、退社するの？」っと聞くソラ。

しかし、ルークは、

「いや、ルークは……死んだ事にする。」っとルークが信じられない事を言った。

「「えっ？」」っとソラとリオル。

「退社をすれば、あいつ（エミリア）が探すかも知れないし」っと言うルークだが。

「それだけは、絶対にダメ」っとソラ。

「お兄ちゃんが一番分かるでしょう？もしもルークが死んだ事にしたら、一番悲しむのは、エミリアさんよ」っとソラが少し怒りがこもった言い方をする。

「……」何も言えなくなる、ルーク。

「例え、ルークが死んだとしても、エミリアさんは信じないわ。必ず探すわよ。死んだのは嘘だと自分に言い聞かせて」っとソラが続ける。

だが、ルークは……

「あいつを使えば……エミリアも諦める。」

「まさかっ！！」っとソラが声をあげる。

「そう、あいつを使う」っともう一度言うルーク。

「そんな事したら、カイン兄さんが……それに、何よりお父さん達が許さない。」っとソラが怒る。

「カインが言っていた、俺は兄貴の血で救われた。もし、俺が助からなかったら、俺の体を利用しても構わない、っと。何せあいつは俺の血で生きて、そして死んだ。」っと元氣なく言うルーク。

「カイン兄さんの奇病の件ね」っとソラが元氣なく言う。

「僕も、カイン兄さんの体の事について聞いた。承認として……。確かに言ってた。俺が死んだら体を利用してもいいって」うつ向きながら言うリオル。

「でも、お父さん達が……。」と言ったソラだが。

「……。もう、決めた事だ。父さんも母さんも関係ない……。」
っとルークは元氣なく言う。

「……。エミリアさんは……。どうするの？」っとソラが聞く。

「あいつは、もう一人前だ、俺がいなくてもやっていける」っと答えるルーク。

「……」これ以上なにも聞かないソラだった。

「まずは、髪型を変えないと。」っと何処かに行こうとするルークに対してソラが言う。

「本当に……。良いのね」っとソラが言う。

そしてルークが立ち止まりそして、こう言う。

「ルーク・フィレンは、今日で終わり。俺は、ディオ・ルタ・オルテガだ。それと……。お兄ちゃんって呼ぶな。」と言って歩き出したディオ。いつも通りに言っただけだったが、ソラには分かってた。顔はいつもの同じだったが、心はとても悲しんでいた。

ソラとリオルから少し離れた所で立ち止まり、ディオは涙を流した。
そしてディオは呟いた。

「エミリア……みんな……すまない」っと。

そしてまた歩き出したディオだった。そしてディオは通信機とパンフレットを取り出した。パンフレットはディオンからもらったものであり、実はすみの方にディオンの番号が書いてあった。そしてディオは書いてある番号にかける。

『はい、ディオンです』

「どうも、ルークです」

『……ディオでいいですよ。』

「!!!?」

「なぜそれを？」

『ソラちゃんとリオル君に聞いてないんですか？』

「???」

『彼女らは、僕達の立ち上げた部隊に入ってるんです』

「なんだって!?!」

『驚くのも、無理がないと思います。どうでしょう。会つ日にちを

縮めましょうか？もちろんあなたの都合に合わせますよ。デイオさん。』

「明日……」

『???』

「明日の10時に、この店で」

『この店とは、そのパンフレットの店ですか?』

「ああ」

『残念ですが、その店、潰れてますよ。』

「なにっ!?!」

『僕のお気に入りの店があるんですが、その店にしませんか?』

「わかった。なんという店の名前だ?」

『ラッピーカフェと言う店です。名前は、あれですが結構人気の店なんですよ』

「わかった。ラッピーカフェだな」

『はい、あつ、いい忘れました。ラッピーカフェはパルム大都市のカフェ街の中間辺りです。』

「わかった。」

『それでは、また明日』

「まってくれ。」

『はい？何でしょうか？』

「そこで詳しく話してもらうかな」

『貴方も、そのつもりで来てくださいね』

「ああ、わかった」

『それでは、失礼します』

電話が切れ、ディオは通信機とパンフレットをしまい、歩き出した。

次回

第二話：嘘と真実

1―2 悲しい決断（後書き）

次回、第二話：嘘と真実ですが、その前にオリキャラの登場人物の紹介です。

紹介のキャラは

- ディオ（ルーク）
- ソラ
- リオル
- ディオ
- ソロ
- ミケ　　です。

謎の5人は名前が5人登場次第書きます。　ちよくちよく謎の5人が登場してきます。本格的活動はまだしません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4736z/>

ファンタシースターポータブル2i～異世界の5人～

2011年12月21日01時54分発行